PROJECT

外から見た日本

文・写真
桑山敬己

共同研究 ● 海外における人類学的日本研究の総合的分析（2010-2013）

日本人の自画像：交錯する内外の視点

人間は誰でも「ひと」の目を気にする。何をどのように気にするかは個人差や民族差があるだろうし、時代によっても違うだろう。近現代の日本人の場合、気になって仕方がなかった「ひと」とは文明の範を垂れた欧米（西ヨーロッパとアメリカ合衆国）であった。日本の指導者は彼らが日本について書いたものを熱心に読み、あるときは感心しながら、あるときは反発しながら自画像を描いてきた。

日本の人類学の父と言われる坪井正五郎もその一人であった。彼は、大森貝塚を発見したアメリカのモースが、貝塚の住人を人食い人種と呼んだことに刺激を受けて、考古学を含む広い観点から日本、ひいては人類社会を研究するようになったという。小泉八雲ことラフカディオ・ハーンも、近代日本人の自画像に大きな影響を与えた人物である。今日、ハーンといえば『怪談』の作者として知られているが、彼は卓越した日本文化の観察者でもあった。事実、ハーンは西洋における日本の紹介者としての地位を、『日本瞥見記』、『心』、『日本』などの著作によって築いたのである。ただし、彼の日本語能力には限界があったようで、少し遅れて登場した柳田國男は、「あの多感な心臓を以て触れたものが、最も不自由であつた眼を以て写したものより、勘違ひが多いといふことは妙な話だ」と述べ、「それといふのが言語の障壁は可なり高いから」と批判した（柳田 1998：37）。ハーンは片目が不自由であった。さらに時代を下って第2次世界大戦後になると、周知のように人類学者のベネディクトが『菊と刀』を著し、国内外の賛否両論に晒されながらも、日本研究の古典としての地位を不動のものとした。このように、近現代の日本人のアイデンティティの一端は、明治維新と敗戦という歴史の大きな節目に登場した欧米の論客との対話を通じて形成されたのである。

忘却される貴重な海外の日本研究

では20世紀後半にはどのような動きがあっただろうか。高度経済成長を経て、日本の国際的地位が向上した1960年代や70年代には、いわゆる「日本人論」や「日本文化論」が論壇を賑わした。その中には中根千枝の『タテ社会の人間関係』や土居健郎の『「甘え」の構造』のように、学界を代表する人物が一般向けに書いた作品もあったが、多くは根拠の曖昧なエッセイであった。ハルミ・ベフが「大衆消費財」と呼んだ所以である（ベフ 1997）。

その一方で、アメリカとイギリスを中心とする英語圏の人類学では、実証的な日本研究が着実に積み重ねられていった。その代表格がミシガン大学日本研究所による一連の研究である。この研究所は50年代初頭に岡山市に拠点を置いて、いくつかの農村や漁村や山村を徹底的に調査した。その結果はモノグラフとして発表され、Richard Beardsleyらによる*Village Japan*（1959）は、今日に至るまでもっとも詳細な日本農村研究として評価が高い。また同時期に香川県高松市の塩江町でRobert Smithが行った調査は、後に日本語でも出版された『現代日本の祖先崇拝』や『来栖 むらの近代化と代償』の基礎となった。理論的志向は異なるが、これらの研究は戦前に熊本県球磨郡の農村を調査したJohn Embreeの*Suye Mura*（1939年刊、邦語訳『日本の村──須恵村』）の伝統を受け継ぐものである。以降、日本の近代化の進展とともに共同体研究の焦点は都市に移り、Ronald DoreやEzra Vogelを経て、Theodore Bestor、Jennifer Robertsonらに受け継がれた。

これら著作は膨大な研究蓄積の一端に過ぎない。問題はその多くが日本人研究者の間では存在すら知られていないことにある。言語の壁が立ちはだかっていることは事実だが、たとえ翻訳されても一部の例外を除くと注目されることはなかった。さらに近年では英米の大学でも、農村研究のような「古臭い」分野は顧みられなくなり、貴重な研究が忘却されつつある。とすると、多くの知的遺産が、描いた側と描かれた側の双方で消滅しつつあることになる。本共同研究はこうした危機意識のもとに始まった。

共同研究の目的と目標

2010年秋に始まった本共同研究の最大の目的は、海外における人類学的日本研究の実態を把握し、異文化としての日本の表象にまつわる問題を検討することにある。地域的には研究蓄積のもっとも多い英語圏を中心としている。そのため、メンバーの半数以上は英米の大学で日本を研究対象に学位を取得した者であるが、日本が位置する東アジアにおける日本研究の分析も視野に入れている。さらに、日本を自文化として研究してきた日本民俗学の成果も検討して、内からの語りと外からの語りの比較も行う。

具体的目標は以下の通りである。

①文献リストおよび文献解題の作成

徹底的な文献調査を行って基礎資料とする。

②知的系譜の同定

主要な著作の理論的・民族誌的・政治的背景などを検討して、かの地における日本観の流れを明らかにする。

③文化研究全般の再検討

自文化が異文化として外部者に描かれたときの問題を通じて、文化研究の在り方そのものを再検討する。

④対話の場の形成

描かれた者が描いた者といかに対話して、双方に満足のいく文化像を提示するかを考える。

民族誌の三者構造

以上の③と④の目標と関連するのが、「民族誌の三者構造」という考えである。詳細は拙著『ネイティヴの人類学と民俗学』をご覧いただきたいが、私見によれば、人類学的営みの中心である民族誌には、「描く者」と「描かれる者」と「読む者」の三者がいる。古典的な民族誌が書かれた植民地主義の時代

*Village Japan*の研究対象になった岡山市の新池（にいいけ）集落。新池は筆者の博士論文の舞台でもあった。1984年夏の撮影。

にあって、「描く者」は宗主国の人類学者であり、「描かれる者」は土人と蔑まれた植民地のネイティヴであり、「読む者」は宗主国の知識階級であった。この三者関係において、異文化つまりネイティヴの文化は、それについて調査した外来の研究者の言語で、宗主国の読者を念頭に置いて書かれた。だから、エヴァンズ=プリチャードの*The Nuer*（1940）は、イギリス人の著者が独立前のスーダンで出会ったヌエル族について、主にイギリスの読者を対象に英語で語ったものである。当たり前のようだが、ここには大きな問題が潜んでいる。なぜなら、描かれたところのヌエル族は、著者と読者の対話の輪から完全に排除されているからだ（図）。換言すれば、民族誌的語りは宗主国の中で自己完結しており、ネイティヴは思考の対象にしか過ぎなかったのである。

だが脱植民地化の時代にあって、こうした関係は過去のものとなった。教育の普及に伴って、かつては描かれるだけの存在であったネイティヴは、自文化について書かれたものを読み、ときとして強い異議申し立てをするようになった。また、いわゆるネイティヴの人類学者の登場によって、旧宗主国の研究者は専門的なレベルでも描かれた側と交渉せざるをえなくなった。

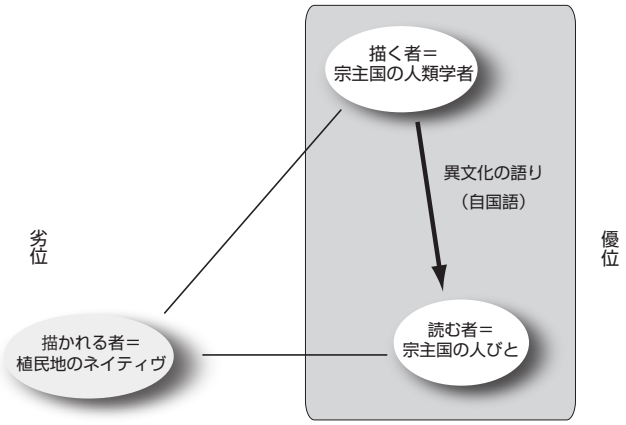

図　古典的な民族誌の三者構造。

日本人研究者の立ち位置

日本人が英語圏における日本研究を検討する際、こうした観点から立ち位置を決めることは重要だと思う。なぜなら、戦後の学界ではアメリカとイギリスが圧倒的な影響力を持っており（フランスやドイツの学問でさえ英米経由のことが多い）、彼らにとって日本人研究者はローカルな情報提供者に過ぎず、真の対話の相手ではないからだ。つまり、上述のネイティヴの人類学者の域を出るものではないのである。もちろん、戦前のヨーロッパ大陸では、岡正雄がウィーン大学の日本研究に大きな足跡を残したし、戦後でも中根の*Japanese Society*（『タテ社会の人間関係』の英語版）のように、広範な影響力を持った著作はある。しかし、それらはどちらかというと例外であって、描かれた側に回った日本人研究者の声が英語圏に伝わることは稀であった。

本共同研究は、こうした状況の突破口を見出すことを目指している。ネットの時代にあっても、学問における活字の重要性を考えると、成果を英語の本として出すことが効果的であろう。いたずらに英米の大手出版社を狙わず、周辺の声に耳を傾けるところと協同したい。もちろん、刊行の目的はあくまで描いた側と描かれた側の間に対話の場を作り出すことにある。批判のための批判でないことは付言しておきたい。

【参考文献】

ベフ，ハルミ 1997『イデオロギーとしての日本文化論（増補新版）』思想の科学社。
桑山敬己 2008『ネイティヴの人類学と民俗学――知の世界システムと日本』弘文堂。
柳田國男 1998『柳田國男全集（第8巻）』筑摩書房。

くわやま たかみ

北海道大学大学院文学研究科教授。主として英語圏の日本研究をネイティヴの立場から考察してきた。主著は*Native Anthropology*（Trans Pacific Press, 2004）。現在、日本人による人類学的日本研究の本格的方法論の開発を目指している。